# 序

平素からりんくう総合医療センターの運営に対しましては甚大なご支援を賜り、心から感謝申し上げます。平成27年度の病院年報が出来上がりましたので、お届けします。

平成9年、当センターが感染症センターと共にこのりんくうタウンに新設移転されてから18年余りが経過しましたが、近年における急速な医療環境の変化に対応すべく、特にこの数年間は様々な改革と変遷を重ねて参りました。まず、平成20年度には大学と近隣の4市3町の強力な御支援により、市立貝塚病院と連携した泉州広域母子医療センターを開設し、関西でも有数の産婦人科医を集積した母子センターを構築いたしました。そして、平成23年度には医療改革に柔軟、かつ効率的に対応するべく地方独立行政法人化し、さらに平成25年度は隣接する大阪府立泉州救命救急センターと統合し、外傷のみならず、窓口を一本化して心臓、脳を含めた超急性期疾患に対応する3次および2次救急を維持できる、病床数388床の急性期病院に変貌いたしました。

平成27年度は、この新たな体制を効率よく機能させるために必要な医師・看護師を含めた医療従事者の確保に努めた平成26年度に引き続き、完成したばかりのりんくう教育研修棟の“泉州南部卒後臨床シミュレーションセンター(サザンウィズ)”を活用して医療従事者育成に全力を尽くすとともに、心臓・脳の領域のみならず、多くの領域で救命救急医と病院の専門医との協働が可能になる診療体制と病棟運営を工夫した年でもありました。また、手術室看護師の2交代勤務制を導入することによって、外科、整形外科、泌尿器科など、一部の手術は夜間までの予定手術枠を可能にする手術室体制を構築し、さらにはICTを応用することなどにより、綿密で安定した病院運営を可能にするための経営戦略室の設置等々、これからの医療を見据えた準備と試行を積み重ねた年になっています。

また、前年度におけるエボラ出血熱の疑似患者受け入れに加え、平成27年度では、中東で流行し、韓国で感染者が多発した中東呼吸器症候群(MERS)の疑似患者を受け入れる機会があり、総合内科・感染症内科の医師、感染症認定看護師、そして検査技師などの感染症センター関連職員が東京の施設や行政と連携して、特定感染症指定医療機関としての貴重な経験をさらに積み重ねることのできた年でもありました。

さらに、関西国際空港から入国する外国人旅行者の増加に伴い、当センターの一つの看板にもなっている国際診療科においては、さらに円滑な外国人受け入れが可能になってきました。

そして、この年度における最も大きな出来事ともいえるのは、8月1日付で山下静也先生が病院長として赴任されたことです。様々な施策と急速な医療改革が進められている中、南泉州地域における新たな、そして良質な地域包括ケアシステムの構築に向けて、皆様方との密な連携をさらに深め、より良い医療環境を整えるべく、山下病院長ともども、病院職員が一丸となって邁進する所存です。

この地域で日頃からお世話になっております方々、また、何かとご支援を頂戴している大学、諸機関の方々、今後とも引き続き、益々のご指導とご鞭撻を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

理事長　　八木原　俊克

# 序

平成27年度はりんくう総合医療センターが地方独立行政法人化してから5年目、さらに大阪府立泉州救命救急センターとの統合後3年目の年でしたが、当センターにとって激動の年度でありました。8月より小生が病院長を拝命し、その就任直前に病棟の職員に結核が発生し、病院が一丸となって対応させて頂きましたが、幸いにも大事に至らず、二次感染も防ぐことができました。病院長自らが大阪大学大学院医学系研究科総合地域医療学寄附講座の特任教授を兼任して、基礎研究・臨床研究、学会活動を行いながらの勤務ですが、赴任後は各診療科の人員の補充のために、大阪大学を中心に、関係の大学とも密に連携しながら、医師を中心とした人材の確保に奔走してきました。さらに、泉佐野泉南医師会を中心とする多くの医療関係の方々とも協調して、当センターの運営を改革しようとしております。最も重要視した点は、学術・研究活動です。これまで、当院の学会発表や論文発表はそのレベル、数ともに十分とは言えない状況であったと思われますが、泉州南部地域にとどまらず、大阪から世界に発信できる臨床と研究ができるセンターとして、少しずつレベルアップをしていきたいと思っています。その一貫として、若い研修医には国内のみならず国際学会でも発表して頂き、また英文論文も発表できるように指導体制を整えてきました。さらに、八木原理事長が会長となって、平成28年2月27日に「つなげる医療　－ネットワークとチームマネジメント－」をテーマとして、第9回日本医療マネジメント学会大阪支部学術集会を開催し、多数の参加者が活発な討論を行い、現代の複雑で難しい医療を如何に効率よく運営できるかについて考えることができました。本学会の運営には当センター職員全員が一丸となって、企画から運営まで頑張った貴重な機会となりました。一昨年度に『泉州南部卒後臨床シミュレーションセンター』が新設され、臨床技能の習得及びチーム医療の充実を図る教育プログラムを開発してきました。この斬新な試みにより将来有望な若手医師を全国から集め、泉州南部地域の医療を支える医療従事者を育成し、究極的にはこの地域の医療水準の向上に大きく貢献できるのではないかと考えています。実際、初期研修医の人気も最近急上昇し、研修枠も増えています。

一方、当センターは特定感染症指定病院、災害拠点病院、大阪府がん診療拠点病院、地域医療支援病院、泉州救命救急センターなど、様々な医療機能を有した高度急性期病院で、市立貝塚病院との泉州広域母子医療センターの共同運営や、泉州南部における病病連携・病診連携をより迅速にする新たな診療情報連携システム「なすびんネット」を導入し、地域医療の連携を積極的に進めてきました。また、関西国際空港の対岸という土地柄、国際診療の領域でも先駆的な取り組みを行っています。近年、海外、特にアジア地域からの旅行者数が激増し、その診療への対応が求められているだけではなく、大阪在住の多数の外国人の診療も担っております。最近では重症急性呼吸器症候群(SARS)、新型インフルエンザ、エボラ出血熱、中東呼吸器症候群(MERS)等の新興感染症のアウトブレークに備えて、我が国に4病院しかない特定感染症指定医療機関の1つとして、関西の砦としての大きな役割も求められています。

皆様ご存知のとおり、都道府県が主体となって「地域医療ビジョン」が策定され、これまで以上に地域完結型医療の実践が求められています。当地域は従来から非常に病診連携・病病連携が緊密に行われてきた地域でありますが、当院では消化器内科や眼科、放射線科等、一部診療科の医師不足により、あらゆる病態に対応できるわけではないという現実の重要課題があります。しかし、今年からは消化器内科の常勤医を確保し、さらに内分泌代謝内科の常勤医も充実しつつあります。大阪南部で良質な医療を提供できるように、今後とも皆様のご理解とご支援を何卒宜しくお願い申し上げます。

病院長　　山下　静也